

試聴会・訪問記掲載

河口無線ハイファイディリティ試聴会報告(2016.7.23・7.30)

河口無線で開催された HANIWA のコントロールアンプ「HDCA01」の試聴会に行ってきました。特に HDCA01 に興味があったわけではありませんが、エアータイトのパワーアンプと組み合わせて B&W 802D3 を鳴らすというので参加しました。さらに 1 週間後にはスピーカーを JBL4429 とタンノイターンベリーに替えて実施されました。

7月23日(土) PM1:15~PM3:00

7月30日(土) PM1:15~PM3:00

会場 3F ハイファイディリティ試聴室

<使用機材>



HANIWA コントロールアンプ HDCA01 ¥972,000



エアータイト 管球パワーアンプ ATM-1S ¥594,000



B&W スピーカーシステム 802D3 ¥3,672,000 (ペア)



JBL スピーカーシステム model4429 ¥648,000 (ペア)



タンノイ スピーカーシステム ターンベリー/GR ¥972,000 (ペア)



7月23日のセッティング



7月30日のセッティング

<試聴の経過>

最初に交響曲と室内楽の再生があつてから、担当者から再生における位相の重要さが強調され、HDCA01 の設計コンセプトの説明がありました。説明が丁寧でなかったのが分かりにくかったのですが、音源はアナログから 192KHz24bitWAV に取り込んだものを PC オーディオで再生し、HDCA01 で位相合わせをして送り出すもののようです。位相合わせというのは、ウーファーの低音領域からスーパーツイーターの高音領域までのうち、どうしても低音の方が遅れて出てくるので、その分、相対的に位相を早めて送り出すようにしているとのことでした。

ロック系の音楽、コントラバスが活躍する交響曲、ピアノソナタ、フラメンコ、ジャズなどが順次再生されていきましたが、確かに低音が前に出てくる迫力は感じられました。一方、せつかくの元音源であるアナログの銘盤の弦の倍音の出方が薄れたり、3次元的な音場表現が消えてしまうような印象がありました。その意味で、音が前に出て迫力を求める音楽ジャンルではメリットがあるかもしれませんが、クラシックのコンサートホールの雰囲気再現を期待するには向いていないように感じました。

もともとアナログの持つ良さがデジタル化することによって失われてしまうこと、HDCA01 がデジタルアンプであることに加えて、音源そのものが持つ位相特性をデジタル的に処理して替えてしまうことに無理があるのかもしれませんが。この後参加した、シマムセンで開催されたアキュフェーズのアンプの試聴会では同じ B&W のスピーカーが使用されていましたが、同じデジタルでもここで聴いた CD の方が倍音の伸びも、音場表現の方も 1 枚上のように感じました。

エアータイトの管球パワーアンプ ATM-1S について言えば、8W の 300B シングルアンプながら、B&W 802D3 を十分駆動する能力があることが分かりましたので、HDCA01 とは別の組みあわせで聴いてみたいと思います。

30 日には前半のタンノイのターンベリー/GR のみ、クラシック、ジャズとりまぜて数曲聴きましたが、さすがにタンノイと真空管アンプの相性がよく、前回よりも音のバランスは良いように感じました。しかしながら、3次元的な音場表現が薄れ気味になることや倍音の伸びが物足りない印象は前回と同様でした。このことは、いくらアンプから位相を調整して送り出しても、スピーカーのネットワークで位相が回ってしまいますから、却って余分に位相を狂わせてしまい、むしろそういった処理をせず、メーカーが調整したネットワークをそのまま活かす方がいいのではないかと考えられます。以前に[トリノオーディオの試聴会](#)がありましたが、その場合は、客席のマイクで拾った音で位相を調整しますので、部屋やスピーカーの動きやネットワークの影響などを全部含んだ上での調整となることから、こちらの方が合理性があるように考えられます。

